

域の特性に気づかせ、地理的興味を養おうとしている。「5. 学校を中心とした身近な地域の調査」では、通学ルートを利用した調査から、情報を地形図上でまとめ、教室内で仮説を検証し地域特性の把握に導く授業を紹介している。

ここまでに紹介したように、本書は新たに始まる「地理総合」の内容にこだわりながらも、そこに様々な授業の工夫を詰め込んでいる。まず、地図やGISの技術習得に重点を置いた第1章では、地理を学習するための最重要ツールである地図をわかりやすく丁寧に説明し、従来からの技術継承を図っている点が評価できる。なお、この部分は日本のe-Japan戦略から始まる「日本型IT社会」の構築や、地理空間情報活用推進基本計画における「地理空間情報の高度活用社会」の実現など現在の国家的戦略と密接に関係する部分である。そのため、情報通信技術（ICT）を避けるのではなく、「地理院地図」などウェブサイト上で閲覧できる地図などを極力活用し、これまで行えなかった魅力ある授業を行うための参考になる。

国際理解や国際協力を生徒が主体的・対話的に学べるよう意図された第2章については、地誌とは異なるため当該部分の扱いに困っている教員が、適切な授業をイメージできるような内容となっている点が評価できる。また、多くの教員が行ってみたいと感じる工夫をふんだんに盛り込んでいるのも魅力である。なお、高等学校学習指導要領によると、当該部分で学ぶのは「生活・文化」（生活および文化）ではなく「生活文化」（生活のありよう）であり、考え方によっては、これまでの高校地理よりも狭い意味で使われる可能性がある。その場合には、ここで紹介される授業のように、グローバルな内容を生徒の日常生活と結びつける工夫がいつそう重要になる。

防災やESDなど現代的なテーマや地域調査に関する第3章では、生徒が世界と日常生活圏を結

びつけ、一人の市民として社会に参加するためのきっかけ作りを行おうとする工夫が評価できる。高等学校学習指導要領によると、高校教育で「持続可能な開発」を扱うのは地理の役割とされており、ここで紹介される授業はそれを担うために十分な内容である。なお、この第3章は、第1章に記されているGISや地図の技術を活かす部分である。地理院地図などのツールが日々充実しつつあり、それらを使ってさらなる授業の改良が期待できるため、読者は是非とも第1章と第3章の内容を結びつけて読み進めてほしい。

以上の様に本書は、これまでの実践の積み重ねから得られた経験を基にした、内容豊かな素晴らしい授業報告であり、また「地理総合」への魅力ある提案でもある。それぞれの内容は執筆の意図が明確でわかりやすいだけでなく、授業の風景を再現できるように配慮されている。これまで先人達が培ってきた成果を共有し、互いに有効活用することの重要性が伝わってくる書籍である。

（橋本雄一）

矢ヶ崎典隆・加賀美雅弘・牛垣雄矢編：『地誌学概論 第2版（地理学基礎シリーズ3）』朝倉書店、2020年2月刊、174p., 3,400円（税別）

本書は、朝倉書店から刊行されている「地理学基礎シリーズ」内の1冊で、2007年に刊行された初版の第2版である。初版は10刷りまでなされている。本書については、世界的に著名な地理学者で、残念ながら鬼籍に入られた偉大な地理学者、吉野正敏、竹内淳彦による書評がすでにある（前者は地理学評論81（6）（2008年）、後者は経済地理学年報53（3）（2007年））。ただし、第2版ではあるものの、内容的には本書は初版から大幅な変更がなされており、若輩者が改めて本書について

書評を書くことも許されると判断している。もちろん不変の部分もあり、それについては評者が著名地理学者と同じ評価をしている場合があることをあらかじめ断っておく。

周知の通り、この地理学基礎シリーズは東京学芸大学で、将来地理学関係教員をめざす学生向けの教科書としての位置づけである。こうした方針は初版刊行時から不変であろうが、最近10数年で世界ではグローバル化が急速に進み、各国間の距離はますます縮まっている中で、世界を知ることの意義は高まってきた。同時に、2010年代後半になされた新しい高等学校学習指導要領の公示によって、高校生は必修科目「地理総合」を学習することになった。これらの事情が反映され、第2版は大幅改訂がなされた。

本書は、大学での半期の講義回数に対応するように、15章から構成されている。それぞれの章は、ここでは個々を挙げないが、それぞれのトピックや地域に関する専門家によって丁寧に執筆がなされている。本書には「部」は設けられていないのだが、評者は大きく4部に分けられると考えている。以下、掲載順におおまかな内容を紹介してみよう。

第1部とすべき部分は、第1章「地誌学の視点と方法」が該当し、本書の編者3名が丁寧に説明をしている。まず地誌学の目的が説明された後に、地理学史における地誌学の位置づけ変化、地誌と教育との関わり、地誌学と地域研究との関わり、社会と地誌との関わりが述べられる。次いで、グローバルとローカルという二つの異なる地域スケールでの地域的把握の重要性が指摘される。最後に、次に挙げる、地誌学の基本的な考え方を習得する際に必要な七つのアプローチが主張される。すなわち、(1) 身近な地域の地誌、(2) 歴史地誌、(3) グローバル地誌、(4) 比較交流地誌、(5) テーマ重視地誌、(6) 網羅累積地誌、(7) 広

域動態地誌である。これらの地誌のまとめ方について、次の2～4部で適切なスケールの地域を取りあげて説明がなされている。

第2部とすべき部分は、どちらかというところ、ローカルなスケールの地域における地誌の例である。身近な地域をどのように把握するのか(2章)、地域の動態変化をまとめた歴史地誌(3章)について、川崎市と八千代市を事例に解説がなされている。

第3部とすべき部分は、グローバル地誌である。4章では、現代世界の特徴が人口や文化などのさまざまな主題図に基づいて描かれる。5章は、グローバル化が進む中での地域像や地域変化について、日本を事例に理解する方法が示される。

残りの部分は世界の諸地域に関する地誌で、七つのアプローチのうちの後半四つが駆使される。また、各章にはその地域をどのように捉えることが有効であるのかが、副題として示されている。まずは、日本との比較・交流に着目して描かれた朝鮮半島の比較交流地誌(6章)である。次いで、中国については国家と少数民族との関係に基づいて(7章)、インドについては近代化に(8章)、オーストラリアでは多民族化に着目した(9章)テーマ重視地誌が構築されている。アメリカ合衆国(10章)とサハラ以南のアフリカ(11章)については、それぞれ多様性と統一性、多様な自然と社会の歴史の変遷を軸として網羅累積地誌が記載されている。最後の広域動態地誌は、東南アジア(12章)、中東(13章)、ヨーロッパ(14章)、ラテンアメリカ(15章)を対象とする。それぞれ、風土と伝統的文化、宗教と国家の秩序、EUによる地域統合、人びとの移動と混交に着目して広大な地域の地域性を解明している。

初版から第二版への変更点はさまざまあるが、とくにカラー化がその変化の代表的なポイントである。写真は言うまでもなく、主題図等がカラー

化されたことで非常に見やすくなっている。初版と比べてみると見違えるほどである。また、「世界各地の肉食文化」は初版から継続されており、地誌の中で食事という身近な文化に触れる良い試みである。さらに、第二版で「FOCUS」が付加され、該当するトピックに関する世界的専門家の説明が地域理解の幅を広げてくれる。

本書は、世界の諸地域について、「網羅累積地誌」的に説明した、世界地誌ではない。世界の「網羅累積地誌」については、たとえば同じく朝倉書店による「世界地誌シリーズ」が参考となるであろう。一方で、本書は地誌学を理解するための教科書であり、世界の諸地域の地域的特徴について説明はされているものの、それは単なるひとつのアプローチの例にすぎない。どのように地誌を描けば良いのかという方法のみならず、地誌を学ぶ際の観点を本書から学ぶことができる。結果的に、本書をマスターすれば、地域の観点をとらえ

ることやとらえ直すことにも繋がっていくのであろう。この点で大学の地理学における専門的な教科書として有効であり、高等学校で新しく必修となる「地理総合」を担当する現職教員にも有用である。地誌とは何だろう、といった疑問をもった際には、まず第1章から始めて本書全部の一読をお勧めしたい。

最後に、本書に対する改善の要望をあげて書評を締めくくりたい。前の段落でカラー化されて見やすくなったと評した。しかし、ほとんどの図表と写真が二段組みの幅に設定されているため、一部は文字が小さすぎて判読が難しくなっている。また、一部の図表にデータ年次や出典が記載されていない。また図5-8では国際特許出願件数の種類表記がなされていないようである。二刷りの際に修正をお願いしたい。

(呉羽正昭)